

機関番号：14401

研究種目：基盤研究 (B)

研究期間：2007 ~ 2010

課題番号：19320118

研究課題名 (和文) 近代化過程における宗教の再活性化の比較的研究

研究課題名 (英文) Comparative studies on religious revitalization in modernization process

研究代表者

竹中 亨 (TAKENAKA TORU)

大阪大学・文学研究科・教授

研究者番号：90163427

研究成果の概要 (和文)：通念的には、宗教は近代において世俗化によってエネルギーを失ったとされている。本研究では、(1) 宗教は近代化の社会的現実に対応して形を変えつつ存続していったのであり、衰退したとはどうもいえない。(2) 宗教の存続のあり方は、種々の因子によって異なる。因子として挙げうるのは、① 所与の宗教状況、とくに支配的宗教が合理色が濃い/薄い性格かなど、② 再活性化の主たる対象となった社会階層・集団 (エリート層、農民、移民等) などが挙げられる。

研究成果の概要 (英文)：Contrary to the conventional understanding, which assumes that religion was on the decline in the wake of secularization in the modern times, this research project made clear:

1. that religion continued to prevail by adopting to the changing social circumstances of the modernization and
2. that the profile of the religious revitalization depended on factors like a) the given religious situation in the society in question (e.g. the character of the mainstream religion) and b) the target social groups (e.g. elite, peasantry, migrants etc.).

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	2,200,000	660,000	2,860,000
2008年度	1,900,000	570,000	2,470,000
2009年度	1,900,000	570,000	2,470,000
2010年度	2,000,000	600,000	2,600,000
年度	0	0	0
総計	8,000,000	2,400,000	10,400,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・西洋史

キーワード：近代化、世俗化、宗教再活性化

1. 研究開始当初の背景

一般に、宗教は近代の時代では衰退するものと捉えられることが多い。というのは、宗教は通例、呪術的世界観に棹さず部分が大きいと考えられ、近代化で社会各領域の合理化が進むことで、エネルギーを失うとされるからである。したがって、近現代を対象とする歴史研究では、ことにわが国においては、宗

教は研究関心を呼ぶことが少なかった。研究テーマに取りあげられた場合でも、近代化過程を浮き立たせる背景要因としての位置づけが普通であった。具体的に言えば、反近代主義の知的・精神的支柱としての宗教、あるいは権威主義的政治体制の一翼を担う既成教会体制というような視角である。

しかし、現代社会を改めて見回すと、宗教

を衰退の相で捉えることがいかに一面的かはすぐに理解できることである。中東の例を見るまでもなく、宗教は国際政治、安全保障上の大問題である。湾岸戦争、同時多発テロ、イラク・アフガニスタン戦争など、それを物語る例は枚挙にいとまがない。原理主義の潮流は、決してイスラム教にとどまらず、ヒンズー教、ユダヤ教、キリスト教など、他の主要宗教にも見られる現象である。現代世界では、一国内の政治や社会においても、宗教が大きな役割を果たしている。たとえば、合衆国におけるキリスト教右派や反中絶運動はその好例である。わが国も決して例外ではない。オカルトブームがあり、新宗教があり、そしてオウム事件があった。

以上のような諸現象の広がりをおぼやかし、これらを宗教的エネルギーの突発的な復活と考えるのは適当ではない。むしろ、衰退を運命づけられたものとして宗教を捉えるという発想自体を問い直す必要がある。

本研究は、以上のような観点から、近代における宗教の役割について検討を加えようとしたものである。近代以降の社会変動のなかで宗教の果たす役割はどのように変化し、宗教的エネルギーはいかなる変容を蒙ったのか、本研究の関心である。

2. 研究の目的

宗教は近代にかぎらず、どの時代にもその時々の社会的状況に対応し、自らをそれに適応させて存続してきた。ただ、上に述べたような現代世界における宗教の役割がわれわれの認識関心を触発するものである以上、研究の焦点は近代に置かれる。なぜなら、誰の目にも明らかなように、現代の宗教の形姿を決定づけているのがグローバリゼーションであるなら、それは、近代化を一つの歴史的根源として始まったものだと想定しうるからである。

したがって、近代化による社会変動と関連させて宗教の役割を把握することがまず第1の目的となる。一見、宗教とは非親和的な合理化の過程の下で、宗教の果たす機能はどのように変化したのかという問いが中心となる。

近代化は、言うまでもなく、国・地域によって相異なる社会的前提条件の下で進展し、かつまた相異なる時間軸に沿って展開した。したがって、もしわれわれが一律に近代化との対応を想定するならば、これらの地域差、時間差をぬぐい去ってしまう懸念がある。逆に、こうした差異を十分に把握することで、宗教と近代化の関連の具体像を明らかにできるし、さらにはこれら異なる近代化過程に通有する特徴から、より一般的な次元で近代化と宗教を論じることも可能になる。

したがって、第2の目的は、種々の国・地

域における宗教的再活性化を比較史的に論じ、そこにおける共通点と差異を解明することである。

3. 研究の方法

本研究では、世界各地の近代史を専門にする研究者で研究チームを構成した。竹中（ドイツ史）、川本（イギリス史）、長井（フランス史）、中野（アメリカ史）、山口（日本史）、伊藤（ロシア史/グルジア史）である。

まず、研究代表者として研究を全体的に統括する立場の竹中が、研究プロジェクトの基本線を提示した。具体的には、基本的な問題状況を明らかにし、問題設定を具体化した。さらに、プロジェクトを支える理論的枠組について若干の考察を行い、かつまた、今後の研究過程で論点として浮上が予想される問題点を予め指摘した。

こうして、メンバー全員が認識関心を共有し、基本的には同一の理論的枠組のなかで問題を捉え、研究成果を同一次元で比較・対比できる態勢を整えた。

その後、メンバーはそれぞれ、自分の専門分野での作業に移った。その際、まず当該の時代、国・地域での宗教社会学的状況を全般に把握し、全体的な視野を失わないようにした。そのうえで、具体的な分析に取りあげる個別対象を選定し、文献・史料によって接近していった。いうまでもないことだが、その際には、当該の時代、国・地域での全体的状況をつねに脳裏に置き、個別対象はあくまでもそれとの関連で把握することに極力留意した。「ケーススタディのためのケーススタディ」の弊に陥らないためである。

具体的には、竹中は世紀末ドイツの生改良運動とよばれる文明批判的分科潮流を取りあげ、川本は、19世紀末のイギリスで見られた民間の歴史懐古行事に着目して分析を進めた。長井は、19世紀末フランスのユートピア的な社会運動を分析素材とした。中野は、19世紀後半から20世紀までのアメリカ社会とそこにおける宗教の役割をマクロ的に扱い、山口は、明治期日本の財界人グループに見られる宗教回帰の風潮に着目した。伊藤は、19世紀ロシアにおける正教会の社会的役割をロシア主義の文化的風潮との関連で取りあげた。

研究期間の途中では、定期的に研究会合を開き、その時点までの成果を方向しあって、研究の進捗を相互に確認した。同時に、認識関心や理論枠組についても、それが十分共有されているかどうかを確認した。こうした討議のなかで、それぞれの時代、国・地域で種々の共通点、相違点が徐々に浮き彫りにされた。それを手がかりに、各自はその後の研究の進展経路を調整した。

こうして個別研究を積み重ねて、最終的に

成果を突き合わせ、研究の成果を確定したのである。

4. 研究成果

研究成果としては、以下の諸点を挙げるができる。

予想されたとおり、宗教の再活性化は全般的現象として、いずれの国・地域でも程度の差はあれ、確認された。しかし、個々の国・地域では、近代化のあり方によっては、宗教がさほど社会生活から撤退しなかったロシアのような国・地域もあり、この場合は「再活性化というより、宗教的エネルギーの連続性がむしろ目立つと言える。

フランスとドイツのように地理的・社会的に近接した例でも、再活性化の具体的様相はかなり異なったことが判明した。たとえば、カトリック教会の復活の時期や様相は、両国でかなり異なる。したがって、所与の社会文化的状況が再活性化に及ぼす影響はきわめて大きいことが確認された。

なかでも決定的に重要なのは、既成の支配的宗教の性格である。宗教の再活性化は、支配的宗教に対する、何らかの意味での「挑戦」もしくは「反逆」の色彩をもつことが多い。つまり、再活性化は既成の宗教的観念とは対極的なものとして自己規定するわけである。その結果、支配的宗教は、再活性化を逆規定する面をもつことになる。このことは、ドイツについてよく該当する。近代ドイツの支配的宗教としての合理的なプロテスタンティズムに対して、この時期の新規の宗教的胎動は、非合理色の強いものとなった。

もちろん、つねに「挑戦」や「反逆」とはかぎらない。支配的宗教の地位が圧倒的な場合には、宗教的胎動はその内部から生じることもある。この点興味深いのはロシアの事例である。

アメリカ社会では宗教が大きな意味をもつことは、一般にも知られたことだが、歴史的に見て、それが社会・政治的動向と密接に関連することが確認された。特筆したいのは、宗教的刷新のエネルギーが社会改革に結びついていく経路である。ただ、こうした社会改革的要素は、政治的に両義的であって、単純に左右のスペクトル上に位置づけることはできない。この点は、ドイツでも見られる点である。本研究では、この局面を「原理主義」という概念で把握していこうという提唱がなされたが、その有効射程については今後さらに検討が必要である。

再活性化は、それがいかなる社会集団・階層において主として訴求し、また遂行されたかによって大きく形姿を変えるという知見も重要である。エリート層が宗教に関与する場合、宗教生活の概念化・合理化の傾向が強いと言えそうである。つまり、超越的・身体

的な要素を脱落させ、宗教をむしろ倫理と近似するものとして捉える傾向である。明治日本のエリートが禅に向き合う姿勢には、その傾向が顕著である。同様の傾向は、近代ドイツのプロテスタント神学と教養市民層についても見てとれる。明治日本では、キリスト教を社会工学的操作の道具として見る宗教観さえあったが、これはその最たるものと言えよう。

他方、農民層や移民労働者の間では、宗教は従来の非合理的な形姿を依然として強く保つのが一般的傾向である。信徒団体の結束、儀式性などの点で、旧来の宗教生活がそのままに再興されたという観がある。しかし、これを単なる宗教の「復興」と位置づけるのは問題である。というのも、近代化の社会的現実への応答という契機がそこに潜んでいるからである。社会下層の宗教性は往々にして、自己の生活や価値観が「近代」という外からの闖入者に脅かされているという現状認識に立脚しており、その意味で宗教はすぐれて文化防衛的機能をもつようになっている。

以上のような知見が、本研究の成果として挙げられるものである。もちろん、問題のすべてが本研究によって余すところなく解明されたわけではない。今後の研究課題として残されたものがあるのもまた事実である。

もっとも大きい問題は、歴史研究、とくに近現代史研究で宗教を扱う場合に、いかなる宗教概念に依拠すべきかという点である。

これについて、宗教社会学では大まかに言って2つの立場がある。実体論と機能論である。宗教を超越性、神秘的性格などの外形的な特徴から把握する立場と、意味賦与という機能面に着目して捉える立場である。

一般に宗教と言う場合、前者に傾いて理解するのが通例である。しかし、その場合、宗教に含まれる社会事象は少なくなり、その結果、通念的な宗教没落論に単純に合流してしまう懸念がある。

その点、後者は幅広く宗教現象をカバーする利点があり、また社会構造的な問題視角に馴染みやすいので、歴史研究とは親和的である。しかし他方では、宗教の定義があまりに広範になり、敢えて言えば、何でも宗教に含めることになりかねない。

この問題が未解決だというのは、ある意味では奇妙に響こう。宗教を分析する本研究では、本来、研究の開始時点で明らかにしておくべき問題だとも言えるからである。しかし、宗教学においてすら、概念に一致がないことを考えれば、これはさほど異とすべきことではあるまい。本研究では、それぞれの理論的立場には長短所があり、単純に当否を決する問題でないこと、むしろ研究を深めるなかで、平行してこの理論的検討をも進めるべきだという点で、メンバー間で合意して研究に着

手した。

付け加えれば、それは決して、検討の結果として最終的にメンバー間で完全な合意を得ようという意図ではない。むしろ、それぞれの理論的立場の得失を具体的素材のなかで検証していき、それから得られた知見を今後の研究に活かすことができれば、本研究としてはさしあたり、その責を果たしうると考えたからである。

その意味では、本研究はこの点でも十分な成果をあげたと自負している。というのも、歴史研究における宗教というテーマに付随する理論的諸問題を中心に整理することができたからである。それをかいつまんで述べれば、第1に、宗教の再活性化を分析の中軸に据える場合、実体論的なアプローチがやはり不可欠だという点である。機能論に過度に傾くと、社会構造の維持には意味賦与機能による統合がつねに必要なという、いわば自明の結論に落ち着いてしまう懸念があるからである。

他方、実体論に依拠するだけでは、宗教が異なる社会現実と逢着していかに自己変容を遂げるかが十分に把握できない。下手をすると、先にも述べたように、「宗教衰退論」に落ち着いてしまう危惧がある。

こうした得失を勘案することで、今後の研究は初めて建設的・生産的なものになるというのが、本研究の結論である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 14 件)

- ① Takenaka, Toru, “Isawa Shūji’s ‘National Music’: National Sentiment and Cultural Westernisation in Meiji Japan” *Itinerario* 34-1, 2010, pp. 97-118 査読有
- ② 長井伸仁「プロソポグラフィとミクロの社会史—フランス近現代史研究の動向から」『思想』1032、2010年4月、143-159頁 査読有
- ③ 川本真浩「20世紀初頭イングランドのパジェント・ブームと宗教—近代イギリスにおける地域イベントに関する一考察」『高知大学学術研究報告』58、2009年12月、1-10頁、査読無
- ④ 中野耕太郎「『アメリカ史』叙述のグローバル化」『パブリック・ヒストリー』6、2009年3月、16-29頁 査読無
- ⑤ 長井伸仁「歴史研究と記憶—西洋史学の立場から」『フランス哲学・思想研究』13、2008年12月、39-47頁 査読有
- ⑥ 竹中亨「明治のワーグナー・ブーム」『大阪大学大学院文学研究科紀要』48、2008

年3月、33~65頁 査読無

- ⑦ 山口輝臣「竹岡勝也の肖像」(下)、『史淵』145、2008年3月、31~88頁 査読無

[学会発表] (計 18 件)

- ① Nagai Nobuhito, “Impossible liberté: les historiens japonais à l’épreuve de la modernité, Philosophical researches on the phenomenon of ‘Liberty: An interdisciplinary dialogue, Saint Tikhon University, Moscow, 2010年11月23日
- ② 中野耕太郎「人種暴動とその後—シカゴ人種関係委員会(1919~1921年)の秩序形成」日本西洋史学会小シンポジウムIII、2009年6月14日、専修大学
- ③ Toru Takenaka, *Deutsche Softpower in Ostasian. Eine Skizze am Beispiel Japans*, 第2回東アジアドイツ史会議、2008年11月21日、大阪国際会議場
- ④ 山口輝臣「コメント: 信仰における他者—異宗教・異宗派の受容と排除の比較史論」、史学会シンポジウム、2008年11月8日、東京大学
- ⑤ 長井伸仁「19世紀後半のパリにおけるカトリック教会と入移民—地方出身者を中心に」関学西洋史研究会・第10回年次大会、2007年11月18日、関西学院大学

[図書] (計 10 件)

- ① 中野耕太郎 (共著)『アメリカ合衆国の形成と政治文化—建国から第一次世界大戦まで』昭和堂、2010年、(担当: 104~105、154~179頁)
- ② 山口輝臣 (共著)『ユーラシア諸宗教の関係史論—他者の受容、他者の排除』勉誠出版、2010年、(担当: 71~88頁)
- ③ 山口輝臣 (共著)『近代日本の仏教者—アジア体験と思想の変容』小川原正道編、慶応義塾大学出版会、2010年3月、432頁 (担当: 166~217頁)
- ④ Toru Takenaka (coauthor), *Japan and Germany: Two Latecomers to the World Stage, 1890-1945*, vol.1, ed. by A. Kudo et al., Folkstone 2009 (pp. 114-149)
- ⑤ 中野耕太郎 (共著)『アメリカ史研究入門』有賀夏紀他編、山川出版社、2009年 (担当: 88~112頁)
- ⑥ 山口輝臣 (共著)『境界のアイデンティティ』九州史学研究会編、2008年12月 (担当: 319~347頁)
- ⑦ 長井伸仁『歴史がつくった偉人たち—近代フランスとパルテノン—』山川出版社、2007年、191頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

竹中 亨 (TAKENAKA TORU)
大阪大学・文学研究科・教授
研究者番号：90163427

(2) 研究分担者

川本 真浩 (KAWAMOTO MASAHIRO)
高知大学・教育研究部人文社会科学系・准教授
研究者番号：20314338

長井 伸仁 (NAGAI NOBUHITO)
徳島大学・大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部・准教授
研究者番号：10322190

中野 耕太郎 (NAKANO KOTARO)
大阪大学・文学研究科・准教授
研究者番号：00264789

山口 輝臣 (YAMAGUCHI TERUOMI)
九州大学・人文科学研究院・准教授
研究者番号：20314974

伊藤 順二 (ITO JUNJI)
京都大学・人文科学研究所・准教授
研究者番号：80381705